

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第720号 平成26年4月14日

働くアリに幸せを（1）

「働くアリに幸せを」を書かれた長谷川英祐氏は北海道大学大学院の准教授（進化生物学）をされている科学者ですが、同時に素晴らしいエッセイストであり、アリやハチといった生物の生態を分析しながら、人間社会が抱えている問題を柔らかな筆致で鋭く切り取っています。

長谷川准教授によれば、人間の社会はとても複雑だが、個人が集まり組織を作っているという点では生物の集団と何ら変わらないといえます。つまり、その組織の構造とそこに働く力学は基本的に同じという訳です。しかし、そう説明されても「ヒトとアリは一緒にはならないだろう」と思っている人が多いのも事実で、その点について長谷川准教授は、私達には自分のよく知った世界に引っ張られ、「違う」ことを重視するという「思考のバイアス」があるせいだと指摘しています。このために私達は、とかく「違うところ探し」に目が行きがちなのですが、深くものを考えるという観点からは「同じところを探す」という作業も重要なのであり、本書はこの「同じところ探し」の面白さを良く伝えてくれています。

さて、アリといえば「アリとキリギリス」を思い出す様に、勤勉の代名詞のように感じていると思います。しかし、アリのコロニーでは「ある瞬間に7割位のワーカーが働いていないし、長期的に見ても1～2割ぐらいの個体はほとんど働いていない」という話しには驚きました。

長谷川准教授によれば、全員が一斉に働く方が効率は良さそうだけれどそうしないのは、アリは新たな仕事が生じても急にワーカーを増員する事が出来ないために、常に現員の中に予備の個体を用意して不測の事態に備えているからなのだそうです。

それはつまり、環境の変動に耐えるための「リスクヘッジ」というもので、車のハンドルの「あそび」のような機能といえるかも知れません。

そうした余分のコストを負担しない、あるいは出来ない組織は将来にわたって生き残る事が出来ない事は、生物の社会でも人間の社会でも同じだと思いますが、人間が作った会社という組織では、アリの場合と異なり、効率性を追求する中で「あそび」の部分を極力削ぎ落として来ました。それを可能にして来たのは、非正規雇用による雇用調整が不断に行われているためだといわれています。勿論、このような雇用調整が可能なのは、誰でもやれる様な、つまり代替可能な仕事の場合であって、

そうした雇用調整は専門的な仕事や熟練を必要とする仕事になればなる程難しくなる事は明らかです。(塾頭：吉田 洋一)